

「美濃市子ども創造館」の設立の趣旨と展望 I

— 地域の子どもたちの教育空間 —

The Main Purposes and Perspectives of “Mino Kids' Creative Art Museum” I

— Educational Workspace with Children in Local Community —

岐阜大学教育学部美術教育講座 辻 泰 秀
TSUJI Yasuhide

1. はじめに

平成15年度に美濃市の旧片知小学校に片知生涯教育センターが設置され、あわせて「美濃市子ども創造館」の活動が始まった。「美濃市子ども創造館」では、子どもたちを対象としたワークショップを主に開催する。そして、各地域にある公民館や学校への出前的な実践も行い、子どもたちの創作的な体験活動を支援している。「美濃市子ども創造館」がそのまま片知生涯教育センターという建物や場所を示すときがあれば、片知生涯教育センターを拠点として「美濃市子ども創造館」のスタッフが各地の教育実践に携わっているという、教育機能を意味するときもある。

小学校でも図工や総合学習の時間などにおいて、子どもたちの創作活動は行われている。けれども、材料や用具が足りなくて個性に応じた活動が十分にできない、表現意欲が高まったところで授業時間が終了してしまう、一人の教師が学級全体を指導するので負担が大きい、といった実態がある。そこで、子どもたちが想像力を発揮できるような材料や用具が豊富にあり、岐阜大学の教官や学生・地域の人々・学校の教職員などの教育ボランティアが丁寧に支援する場所や機会として「美濃市子ども創造館」を位置づけた。

「美濃市子ども創造館」の開設の趣旨は、①学校の再編によって生じる空き施設を芸術文化の向上のために活用する。②岐阜大学等のスタッフが生涯教育や美術教育に関する研究を進めるとともに、地域社会の教育普及活動にも積極的に取り組む。③美濃市の恵まれた自然・文化・素材を生かしながら、新たな芸術文化の創造をめざす。以上の3点にまとめられる。本稿では、そのような「美濃市子ども創造館」の設立の趣旨や経緯について明らかにする。

2. 学校の再編によって生じる空き施設の活用 — 芸術文化を通じた交流 —

美濃市の板取川流域にある下牧地区には、平成15年3月まで片知小・長瀬小・蕨生小・神洞小の4つの小学校があった。児童数の推移から、今後も複式学級の編成が続く学校があるなど、少子化に伴う困難点が行政やPTA関係者から指摘されていた。もちろん小規模学校ならではの特徴を生かした教育活動が展開されてきたものの、子どもたちが多くの友達や人々とかかわる中で、社会性を広げたり切磋琢磨する機会に恵まれないことが顕在化してきた。

いずれの学校も明治時代初期に創立された伝統のある学校であり¹⁾、地域の生活文化に根ざした優れた教育実践が行われていた。そして、学校・地域・家庭の連携も密接であったことから、子ども一人ひとりの個性を生かした教育が実現されていた。したがって、学校の再編に際しては、様々な意見があったに違いない。再編が必要であるとわかっているにもかかわらず、実際に閉校となると学校への愛着や懐かしさが込み上げてきて、残念である・大変淋しい・感無量の気がすると卒業生は述べている²⁾。

しかしながら、将来の教育計画に鑑みて検討が加えられた後³⁾、平成15年4月に長瀬小学校の校舎を使って4校が統合することになり、改めて下牧小学校が設立された。そして、片知小・蕨生小・神洞小の各小学校の校舎は、それぞれの生涯学習センターに移行することになった。

学校施設への国の補助金で校舎を改築してきたことや、地域における教育施設としての役割を考えれば、そのまま生涯教育（社会教育）施設として活用することが妥当である。ただし、片知小・蕨生小・神洞小は比較的近い距離にあるし、既に各地区には多目的に使用できる公民館が存在している。地域の人々が交流する上で公民館や地域のコミュニティーセンターの役割が大きいことはいままでもないが、数や規模の適切さを欠けば、施設が十分に活用されなくなる。余裕教室のままであったり、施設や講座は増えているようでも、実際には参加者やスタッフの取り合いになって、多忙化したり活動が分散してしまうことになりかねない。再編後の学校施設については、公民館の機能に加えて、美濃市ならではの特徴的な生涯学習施設にしていくことが望まれる。

そのため、人口が減少している中で同様の公民館を幾つも重複してつくるという方式を見直し、特徴をもつ新たな生涯教育施設の開設をめざして、芸術体験等のワークショップの活動拠点とする構想を立てた。そして、教育委員会において従来の学校施設の規模や今後の学校の配置計画を考え⁴⁾、3校のうちとくに片知小学校をワークショップの拠点とすることになった。

ワークショップという言葉は、美術館の教育普及活動で多く用いられているが、人々が集まり様々な活動を通して交流しようという意味をもっている。「美濃市子ども創造館」においても、大学・社会教育・学校教育・地域社会など関係者がともに手をとりあい、子どもたちと一緒にものづくりに取り組み、将来を担う子どもたちを育成していく。地域における子どもたちを対象とした創作活動を基盤にして、親子や三世代にまたがる実践も加えることによって、生涯教育への広がりを目指したわけである。

「美濃市子ども創造館」では、ワークショップなどを通して子どもたちが自在に創作活動に取り組む機会を提供する。近年、全国各地で欧米のチルドレンズ・ミュージアムを参考した子どもたちのための創作活動の施設づくりが行われているが⁵⁾、その先駆的な実践を行うことができればよいと考えた。おりしも平成14年の9月から11月に在外研究（短期）でアメリカに滞在した間に、フロリダ・ルイジアナ・ミシガン各州のチルドレンズ・ミュージアムの視察を行った。そこでは、展示だけでなく子どもたちが五感を通して様々な体験ができる魅力的な設備やプログラムが用意されており、多数の利用者がいる状況が理解できた。

東京や大阪などの大都市にはチルドレンズ・ミュージアムにあたる施設があり、東海地方でも愛知県に「おかざき世界子ども美術博物館」や「愛知県児童総合センター」が設立された。岐阜県では子どもたちを対象としたこの種の施設や実践は、現在整備されつつある状態である。たとえば「岐阜県美術館」や「みのかも文化の森」といった美術館において、子どもたちを対象としたワークショップや鑑賞教室を実施している⁶⁾。地域の公民館活動に子どもたちの創作活動を取り入れている場合もある。また、岐阜市には「ドリームシアター岐阜」があり校外学習などに使われている。しかしながら、いずれの施設の教育活動も、美濃市の子どもたちにとっては、距離があたり周知されていなかったりして、参加の機会に恵まれていない。

「美濃市子ども創造館」では、美濃市やその周辺部の子どもたちに広くものづくりの機会や場を提供する。そして、将来的には美濃市のみならず岐阜県全体や全国にも発信できるような企画や実践ができればよいと考える。もちろん予算や利用者数は先行事例にはおよばないが、予算や規模ではなく、いかに地域の子どものために大切にしているのかという点での特徴を示していきたい。

3. 美濃市における岐阜大学の教官や学生による教育活動の展開 —大学と地域との連携—

3年ほど前から美濃市において岐阜大学の教官（辻）や学生（美術教育講座・生涯教育課程・生涯教育講座）が教育実践を行ってきており、「美濃市子ども創造館」での活動は、その継続的な実践になる。平成10年度から辻が岐阜県教育委員会の教室開放促進事業の委員長を担当しており⁷⁾、その関係から現地を視察して県内の生涯学習の実態把握をする必要があった。たまたま平成10年度に上牧小学校が教室開放事業実施校になり、空き教室や紙漉き工房を活用した特色ある実践を行ってきたことを知り、平成13（2001）年春に訪問したことがきっかけである。

上牧小学校の周辺は、板取川や山々の景色が美しく、自然環境に恵まれている。そして、教育活動の中に紙漉きをはじめとした地域の文化が活かされていることがわかり、将来教師をめざす教員養成学部の学生たちに、子どもたちや学校の様子を体験的に伝えることにした。平田勝栄校長をはじめとした教職員、子どもたち、そして、PTA関係者も実に協力的であり、明るく開放的な雰囲気の中で大学教官や学生たちを迎えて下さった。

教育実習以前の段階から教育現場にかかわることが学生の実践的指導力を培う上で大切であるため、3年前期までの講義の中で学外実習として上牧小学校に引率するようにした。通常の教員養成では、授業参観を主にする観察実習の期間をとることが多い。今回は、傍らで見ている観察実習から始めるのではなく、いわば参加・共学型の実習として、学生が子どもたちと一緒に話をしたり造形活動をするところから始めた。図工の授業におけるティーム・ティーチングに参加し、積極的に子どもたちに助言や賞賛をする。次の機会には、学生たちが中心になってワークショップ等の教育実践の企画と運営をするといった具合である。上牧小学校は1学年20名程であり教職員の数も限られている。そこに若い先生（大学生）が5～10名程加わることで、いつもとは異なる子どもたちの表情や雰囲気が見られる場面がでてきた。

学生の教職への理解を深めたり実践的指導力を培うために、附属学校をはじめとした研修校において教育実習をすることの意味は大きい。ただし、教員養成学部の再編が話題になる中で、岐阜大学の存在価値が県内で広く認められていくことが必要である。岐阜県では山間部の小規模校が多いが、そのような学校は若い教師を育てるのに好環境である。学生たちが地域の子どもたち、人々、自然とふれあいそのよさを実感することによって、将来地域の学校教育に携わる資質が養われるものと考えている。岐阜大学では地方教育実習を4年生で実施し、毎年多くの学生が参加を希望する。できれば、1年生から地域の教育実践にかかわる機会を多くもつことが望まれる。そのため、教師論、教養セミナーという1年生の授業の段階から、教育活動の企画や運営を行うことによって、学生の力量形成をはかろうとした。

美濃市の小学校は、大学から車で約1時間の距離であり、学校規模・自然環境から見ても、学生たちが子どもたちとのふれあい体験をする場として適している。ただし、継続的に造形活動を伴う教育実践をするためには、拠点となるスペースを確保することが求められる。ティーム・ティーチングをしながら子どもたちと造形活動をするスペース、打ち合わせや教材研究をするスペース、材料・用具・参考作品を保管するスペース、更衣室などが必要になってくる。はじめの段階では上牧小学校の空き教室や多目的スペース、体育館の倉庫などを併用していたが、美濃市の協力を得て改めて「美濃市子ども創造館」として専用のスペースを確保できることになった。もともと片知小学校の校舎や体育館であったため、子どもたちや学生が自在に活動するのに条件が整っている。

美濃市における岐阜大学の教育活動は、小学校の授業におけるティーム・ティーチングのかたちで始まったが、しだいに土曜日等を使ったものづくりイベントとして展開していった。平成14年度から完全学校週五日制が実施され、学校休業日における子どもたちの過ごし方が着目されたことが契機になっている⁸⁾。学校5日制だからといって時間をもて余したり進学塾に追われるのではなく、地域社

会の中で様々な体験活動をする事が求められる。完全学校週5日制に際して岐阜県教育委員会は「地域では、子どもや親子が参加できるたくさんの活動、教室、イベントが開催されています。公民館、少年自然の家、博物館、美術館、図書館など、それぞれの特色を生かしたメニューで、様々な体験活動を実施している施設があります。」⁹⁾と述べている。したがって、美濃市内の各地域にある教育施設において、大学生スタッフが企画や運営の中心になって、芸術活動を通した子どもたちの体験活動を展開するようにした。

このような大学・学校・地域との連携による美濃市でのワークショップの主なものとして「美濃紙ワークショップ」「上牧ワークショップ」「手づくり楽器ワークショップ」がある。

「美濃紙ワークショップ」は、うだつの上がる町並みでの子どもたちの紙を使った造形イベントである。紙という地域の素材や文化、うだつの上がる古い町並みという環境を生かした実践である。紙による服や帽子、貼り絵、オブジェ、染めなどのコーナーを設けて、子どもたちが活動を選択できるようにしている。大学生に加えてアーティスト・イン・レジデンス事業で美濃市に滞在している海外のアーティストもスタッフとして参加する機会が増えている¹⁰⁾。



図1. 和紙を染めて町並みにかざる (2001年)



図2. 紙でおしゃれな洋服をつくる (2001年)

「上牧ワークショップ」は、上牧公民館の活動として月1回の割合で、上牧小学校の体育館を使って造形を中心としたさまざまな活動をしている。ローラー遊び、巨大バルーン、光の造形、ストーンペインティング、木や竹を使ったものづくりなどに取り組んでいる。学校5日制の完全実施に伴い、土・日曜日の有効活用の方法が着目されているが、そのモデルとなる実践になっている。



図3. 蛍光色で光る世界を楽しむ (2002年)



図4. のこぎりや金づちを使う (2002年)

「手づくり楽器ワークショップ」は、美濃市文化会館での手づくりの楽器を使ったコンサートである。子どもたちが主に竹を使って楽器をつくる¹¹⁾。竹を手にとって、たたく・吹く・こする・ふるなどいろいろな音の出し方を工夫する。そして、ケーナ、マリンバ、ピアノなどの伴奏やコーラスにあわせて、竹の楽器をステージで演奏する。



図5. コーナーで音の出し方を知る (2002年)



図6. 竹でつくった笛を吹いてみる (2002年)

以上のように美濃市において実践を行う中で、材料や用具の移動が大変である、参考資料や作品の保管場所が必要である、多くの子どもたちが造形活動できるスペースを確保したいといった事情から、市内に教育活動の拠点を置くことになったわけである。

4. 地域の特徴を生かした創作活動 ー片知の自然、文化、素材からー

現在の学校教育では、総合的な学習に見られるように、地域の特徴を生かした体験的な学習が重視されている。中央教育審議会の答申でも、地域における様々な生活体験、社会体験、自然体験を活性化すべきであるとしている。「子供たちは、具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころとして、感動したり、驚いたりしながら、『なぜ、どうして』と考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学んでいく。そして、そこで得られた知識や考え方を基に、実生活の様々な課題に取り組むことを通じて、自らを高め、よりよい生活を創り出していくことができるのである。」¹²⁾ という。こうした今日的な教育課題を先取りするかたちで、美濃市の学校の多くは、生活科や総合学習が位置づけられる以前から、校外に出かけて地域の人々の生活や自然とのかかわりながら、子どもたちが課題を見つけ出したり新たな発見をする実践が長年行われてきた。

たとえば片知小学校の実践については、「130年のあゆみ」に示されている¹³⁾。片知の子どもたちは、学校の横を流れる片知川の溪谷や瓢ヶ岳（ふくべがだけ）に生息している魚・鳥・植物の観察を継続して行っている。「耳を澄まし、目と鼻で、そして全身でふくべの四季を感じてみませんか」というように、五感を通して四季の自然とのかかわる学習が行われてきた。川にアマゴがいることから、アマゴの飼育活動も10年以上にわたって続けられた。

美濃市は古くから和紙の産地であり、美濃和紙が品質・味わい・造形的な可能性などにおいて優れていることは、広く知られている。昭和の初期には片知地区でもほとんどの家で紙漉きをしていた。現在では少なくなっているが、2軒で伝統的な和紙づくりが行われている。子どもたちは見学や文献を通して、和紙ができていくまでの過程を知る。そして、校庭や近所から生きているコウゾの木を採取してきて、樹皮をむく、煮る、あく抜きやちり取りをする、木づちでたたくといった紙づくりの方法を体験する。このようにして漉いた紙は、特有のテクスチャ（肌理）や強さをもっており、

その魅力を生かした子どもたちの作品が生み出されていった。手づくりの和紙をそのまま使ったり色を染めたりして、お面・はがき・みこし・法被・あかり・のれん・壁かけなどの作品をつくった。そして、子どもたちの表現活動の成果は、みこし祭り、あかりアート展、のれんコンクール、美濃市創造展など地域の特色ある行事を通して公表された。また、片知には山岳信仰との関連から「ふくべがだけのまものたいじ」の伝説があったり、石仏や円空仏が多数残っている。子どもたちは、円空仏を鑑賞したり木彫を試みたりした。

筆者は、まだ「美濃市子ども創造館」の構想がなかった時期に、偶然に片知小学校を訪問したことがある。「美濃紙ワークショップ」をアーティスト・イン・レジデンスのアーティストと一緒に開催したことがきっかけになり、子どもたちと海外アーティストとの交流の在り方を探っていた。そのため、2001年度のレジデンスのアーティストであるマルタ・ジョセフィーナ・ボジック（ポーランド）に同伴して片知小を訪れた。マルタは低学年の子どもたちとコウゾの木から紙づくりをし、それを使ってお面をつくる実践を行った。並行して、クリスティーナ・レナード（クロアチア）も中学年の子どもたちと和紙であかりを制作した。校内には、前（2000）年度にフランス在住の佐伯祥子が指導をした作品も展示されている。佐伯は、レジデンス期間中に片知小学校の空教室をアトリエとし、図工や特別活動の時間に和紙の特徴を生かした共同作品をつくっている。

ゲスト・ティーチャーの試みは、海外の造形アーティストだけではなく、横笛の指導者、地元の伝説の話をする人、星座観察の専門家、魚について詳しい人など、いろいろな機会や方法で行われてきた。近年「開かれた学校づくり」が指針となりながらも、実際には地域や家庭の人々が学校を訪れる条件が整っていない場合が多い。片知小学校では、小規模校ならではの特徴を生かしながら、家族的な雰囲気の中で、人々との交流や人材の活用が行われていた。

このような片知小学校の教育実践の積み重ねは、学校が再編されて途絶えてしまうものではない。子どもたちは、学校だけでなく身近な地域や家庭でも学習をする。学校休業日に美濃市の子どもたちが片知で学習することによって、片知小学校での教育活動と同様のことができるはずである。「美濃市子ども創造館」の教育実践でも、これまで片知小学校で行われてきた子どもたちの体験学習を基盤として、地域の自然や文化を生かした内容を多く取り上げていく。

5. 「美濃市子ども創造館」の開設にむけて

130年余りの歴史をもつ片知小学校の閉校に際して、その施設をどのように活用していくのかについて共通理解をもつことが必要であった。しかしながら、学校関係者が精力的に閉校行事を進めている中で、同時に「美濃市子ども創造館」の開設の準備をすることは容易ではない。学校教育から社会教育へ、学校の教職員から「子ども創造館」のボランティア・スタッフへとといった引き継ぎをスムーズにするというよりは、実際には4月以降に改めて施設整備や組織づくりをしていくことになった。

直前の取り組みとしては、3月の閉校を前にして、平成15年2月6日（木）に岐阜大学の主催で「上牧ワークショップ」の協議会を行った際に、川野社会教育課長から次年度に片知小学校を岐阜大学のワークショップの教育拠点として利用するとの報告があった。そして、2月25日（火）に川野社会教育課長、平田上牧小学校長（前片知小学校長）、辻が片知小学校を訪問し、勝本校長と河合教頭と面談をした。学校施設や備品等を状況を確認し、4月以降に活用したいので、下牧小学校に移動予定のものを除いて備品等を残していただくように川野課長から学校側に依頼があった。

子どもたちを中心としたワークショップの場合、通常50名以上の子どもが参加し、学生スタッフや父兄が20名程加わることになる。片知小学校は全校生徒20名、教職員10名程の学校であったので、スペースがあると言っても、実際には、手狭で机や椅子の数も足りないといった事態が生じてくる。「美濃市子ども創造館」には、子どもたちや地域の人々が集まって交流したりものづくりをする活動

スペース、美術館のように作品や資料を鑑賞するスペース、材料・用具・参考作品等が保管してある収納スペースなど様々な機能や役割がでてくるはずである。当初の予定では、次のような用途・目的の部屋が想定された。

- 多目的スペース（子どもたちのワークショップの会場、作品や材料の保管）
- 実技実習室（絵画・木工・紙工作・陶芸・版画など造形の目的や内容に応じた教室）
- 音楽室（音づくり・手づくり楽器のワークショップの用具の保管）
- 研究室（教育実践にかかわる大学教官や教諭の準備室）
- 作品展示・保管スペース（アーティストや子どもたちの作品の展示と保管）
- 材料・用具保管室（絵画・紙・木工・陶芸など各分野に応じた材料や用具の保管）
- 教育資料室（美術鑑賞資料・美術教育の実践資料・教科書や指導書の整理）
- 倉庫（清掃用具・運動用具・遊具・電気器具などの保管）
- 学生スタッフ控室（教材研究の教室、学生の用具や荷物の保管）
- 講義室（視聴覚機器があり講義や公開講座ができる教室）
- 会議室（打ち合わせやゲストティーチャーのための部屋）
- 一般控室（子どもの付き添いや地域の人々の控室）
- 印刷室（コピーや印刷ができる部屋、印刷用の紙の保管）
- ランチルーム（調理と食事のための部屋、食事体験ワークショップの用具の保管）
- 図書室（子どもの本が多数ある部屋）
- 体育館（多人数でのワークショップの会場、身体活動の場所）
- 更衣室（活動に適した服装への更衣）
- 浴室（夏場のシャワールーム）
- プール（水に浮かぶものをつくって遊ぶための場所）
- 和室（宿泊を伴うようなワークショップや研修の部屋）
- 保健室（子どものケガ、ガゼの応急処置）

片知小学校には、6つの普通教室と音楽室・図書室・家庭室などの特別教室があった。ただし、上記の内容を、片知小学校の教室配置と照らし合わせると、教室が足りないくらいになっている。プールについては、毎年学校の水泳指導に使用されてきたが、老朽化しており施設の維持管理も無理であるとの結論になり、浴室についても予算の関係から見送られた。

プール以上に遊具や運動場周辺の環境について共通理解をすることが課題になっている。ほとんどの小学校には、運動場にブランコ・滑り台・ジャングルジム・シーソーといった遊具が設置されており、休み時間や放課後に子どもたちが集う場所になっている。子どもたちにとっては、遊具が魅力ある場所になっており、そこで遊ぶことが友達とのコミュニケーションの基盤になっている。片知でも4月の閉校後も子どもたち同士や親子が運動場の遊具で遊んでいる光景を多く目にする。遊具の数はそれほど多くはないし、既にさびついているにもかかわらず利用しているのは、子どもたちの教育上、遊具や運動場を欠くことができないからであろう。

ところが、管理面からいえばプール以上に困難を伴う。遊具を使って子どもたちが大きなけがをしたときには、設置者・管理者に少なからず責任がある。学校として常に教職員が付き添っていたり補修している場合はよいが、古い遊具がそのままにしてある状態については、気を使わざるを得ない。統廃合後の学校の運動場から遊具を取り外している他の市町村の例はあるし、そのことによって、管理上の危惧は回避できるかもしれない。

しかし、問題なのは、子どもたちや親子の姿が消えてしまい、名実ともに学校ではなくなってしまう

うことである。運動場に遊具や木々があることによって、石碑以上に子どもたちの学びの場所であったことを示すし、卒業生が学校生活の思い出を蘇らせる。遊具等を取り去りさら地にして小学校の形跡を消してしまうことが、地域の人々や子どもたちのためになるのかが問われる。遊具についてもできるだけのメンテナンスをし、ささやかな子どもたちの楽しみを充足していくことが、しいては地域の子どもたちや若者を大切にしまちづくりにつながっていくようにも考えられる。

たとえば、廃校後も子どもたちの生活感をできるだけ残すこと、あるいは、意図的に学校を再現する試みが行われている事例がある。篠山チルドレンズミュージアムでは、使い古された多紀中学校の木造校舎とその周辺の里山的な環境を生かすように心掛けられている¹⁴⁾。使われていたり残されていた旗・書誌・写真などを収集し、新たにレトロ調の学校家具を創ったり、黒板には子どもの落書きまでかき加えている。遊具も小学校や幼稚園にありそうなものを新設している。大月ヒロ子は篠山の事例について、「古いものをあっさり壊して、新しいものを創造するというのが、これまでの日本の一般的な進化・発展の方法論でした。しかし、今後はこのように、建物・土地・人々の記憶を次世代に丁寧につないでいく方法も多くなっていくのではないのでしょうか¹⁵⁾」と述べている。

こうした事例は、地域の古い学校や子ども時代のイメージを大切にすることによって、斬新なデザインに結び付いたり、子どもたちの教育やまちづくりがはじまることを示している。学校の統廃合とともに、教室で使っていた何げないものや、学校の歴史を物語る資料を廃棄や処分してしまう場合が少なくない。しっかりと片付けなければならないという良心にもとづいているのであろうが、100年以上学校があったことの証しや、学校の生活感を残すことがむしろ大切であると考えられる。

昭和32年に建てられた片知小学校板山分校の木造校舎を訪れことが数回あるが、その度に非常に落ち着いた気持ちになった。既に休校になり年月がたっているはずであるが、子どもたちの作品・写真などが壁面に飾られており、木の机・戸棚・魚とりの道具などもそのまま置いてあった。すぐにでも子どもたちと担任の先生が現れるようなリアリティーが感じられたのである。

結局、下牧地区の学校の再編に伴って、板山分校の木造校舎は取り壊され、本校の片知小学校の校章や学校名の表示が外された。管理や運営面からいえば、しかたがないかもしれない。しかしながら、古き学校や子どもたちの生活イメージをできるだけ残したり再生していくことが、むしろ今日的なあり方であり、うだつ上がる町並みや伝統的な和紙文化を大切にしている美濃市の基本姿勢に合致しているように見受けられる。



図7. 片知小学校の校舎 (2002年)。四季の移り変わりを感受できる環境である。



図8. 板山分校内の掲示作品 (2002年)。休校中も部屋の手入れがいきとどいていた。

片知小学校の学校施設をそのまま有効活用するという目的にしたがいながらも、修繕箇所としてあげられたものは、次のようである。

- ・1階の多目的スペースのカーペットを板の床にする。カーペットは絵の具、木、土を使う造形活動に適さない。水拭きができないしホコリがたまりやすい。
- ・金属製の雨どい（パイプ）を取り替える。金属が腐食し大きな穴があいている。
- ・冷暖房の空調装置（エアコン）を各階に1部屋は取り付ける。防火上石油やガスのストーブの使用をさけるようにする。
- ・カギの補修をする。ドアの開閉しにくい箇所を修理する。
- ・陶芸用のかまを設置できるようにする。土台、配線の確認をする。
- ・作品の展示ができるようにする。吊り下げ器具、照明を設置する。
- ・カーテンや暗幕などを点検し、視聴覚機器を用いた鑑賞活動ができるようにする。紙や作品の保管スペースに遮光用のカーテンを追加する。
- ・トイレの水漏れやタイルの剥がれを補修する。

備品の整備として、とりあえず下記のもものが上げられた。

机（可動式の長机，工作机，児童生徒用机，スチール机など）

いす（工作用角いす，学習いす，事務用いす）

木工用電動機械（電動糸のこ，バンドソー，ベルトサンダー，ボール盤など）

陶芸がま，電動ろくろ，乾燥棚など

コピー，印刷機，裁断機，パソコン，液晶プロジェクター，テレビ，ビデオデッキ，スライドプロジェクター，ビデオカメラ，マイク，ラジカセなど

ロッカー，書架，作品戸棚など

子どものための図書

ピアノ，木琴，太鼓などの楽器，音響機器など

冷蔵庫，湯沸かし器，レンジ，扇風機など

以上のような備品を新規に購入できればよいが、実際には片知小，蕨生小，神洞小，板山分校等の学校備品の有効活用を優先するようにした。絵の具や工作に使用することを考えれば、幾分汚れていても気にならない。むしろ、学校教育関係者の間に引き続き教育活動の場所になるという意識がそれほどなく、廃校で使わないはずであるという考え方から、いきすぎた運び出しが続き非常に困った。とりわけ、ピアノ，パソコン，液晶プロジェクター，図書館の図書，応接椅子などは、高価であり早急に代替えができないので、事前に「美濃市子ども創造館」の使用予定や活動内容をふまえた打ち合わせをしてほしかった。

子どもたちの活動や施設の維持のために使用する物品については、とりあえず再利用できるものを集めたり、新規に消耗品として予算化するようにした。大学教官や学生スタッフが教育実践のために必要な交通費等も支援するという石川道政市長からの提案もいただいた。消耗品的なものは、下記のようなものである。

のこぎり・金づち・きり・ペンチ・ローラー・はけ・カッターマット・はさみなどの造形用具

絵の具・和紙・画用紙・ボンド・テープ・針金・ビニールなどの造形材料

鑑賞や造形活動のための参考図書，写真やビデオといった記録資料など

調理用具・食器類・清掃用具・洗剤など

子ども用図書・楽器類・救急用具など

水道・電気・ガス・電話などの公共料金

運営については、大学教官、図工美術教諭、学校関係者、社会教育関係者、学生代表とった企画・運営組織をつくるように提案した。そして、辻を代表者（運営委員長）として位置づけるようお願いし、社会教育課から了解を得た¹⁶⁾。学校や社会教育施設に参加者募集やスタッフの依頼をする際にも、市における位置づけを明確にしておく必要がある。市の委託を受けたスタッフが教育委員会の活動として行うことによって、学校や社会教育施設の協力はスムーズになる。教育委員会や公民館の教育活動であれば、プリントの配布や子どもたちへの説明を丁寧にしていただける。たとえば学校の教職員が教育ボランティアとして参加する際にも、教育委員会や公的機関からの依頼であれば、学校からの理解を得て、準備や当日の活動のために時間的な都合をつけやすくなる。

運営委員として具体的に活動していただける方の人選をし、その人々がワークショップのたびにスタッフとして実質的な活動して下さることになった。ただし、人事辞令及び依頼文書、打ち合わせ事項の整理など事務手続きについては、教育実践に追われて十分ではなかった。

7. まとめ

「美濃市子ども創造館」の設立にいたる経緯について述べてきたが、その意義については、教育実践の積み重ねによって確かめていく必要がある。初年度においては「上牧ワークショップ」「美濃紙ワークショップ」「手作り楽器ワークショップ」を継続・発展させていく中で、片知の地域ならではの実践を取り入れていくことにする。

ただし、地域を知るには、文献を読んだり外から見ているだけでは不十分である。毎日のように足を運び¹⁷⁾、子どもたちと一緒に活動をしたり、そこに住む人々と親しくなることによって、しだいに理解が進み協力態勢が整ってくる。将来を担う子どもたちのために実践を行っていることを知れば、学校行事のときと同様に協力して下さるであろう。また、地域には様々な特技や趣味をお持ちの人がいるはずである。どのようなゲスト・ティーチャーにあたる人がいるかを知らなければ、協力を依頼することもできない。

1年余りの間に、教育委員会社会教育課のスタッフ、学校の教職員やPTA関係者、大学の教官や学生、自治会を中心とした地域の人々、公民館などの社会教育関係者といった多くの人々と対話をした。そして「美濃市子ども創造館」の今後の教育活動に際して、快く支援して下さいませにご返事をいただいている。子どもたちの発達はやるやかなものであり、教育活動の成果も短期でできるものではないが、できるだけ多くの子どもたちや人々とかかわり、地域の特色を生かした教育の在り方について考えていきたい。

注

- 1) 片知小学校は、明治6年4月に片知村智広学校と称し、現在の陽屋禅院を校舎として開校された。神洞小学校も明治7年に開校していることから、各学校とも130年余りの歴史をもつ。ちなみに、片知小学校は、昭和10年台後半から20年台前半にかけて350人を超える児童数であった。
- 2) 美濃市立片知小学校閉校事業実行委員会 「片知小学校閉校記念誌130年のあゆみ」 2003年
- 3) 2001年8月に美濃市学校再編成懇談会の提言が石川道政市長に出された。そこでは、市内11小学校を3校、同3中学校を2校にする案が示されている。その後、地域における話し合いや各学校の交流授業が行われた。統合前の平成14(2002)年度の児童数は、片知小16、神洞小24、蕨生小40、長瀬小63である。
- 4) 平成13年10月に「1～2年の間に学校の再編によって3校の校舎が空く。その後の利用方法については社会教育課が担当になるので、岐阜大学の教育実践の拠点として活用したい」という話をいただいた。そして、平成14年7月に「蕨生小の校舎については再統合の際に使用する可能性があり、神洞小の校舎や敷地はやや手狭

であるため、片知小を岐阜大学のワークショップの拠点として考えている。」と社会教育課から説明を受け、あわせて図面をもとに改装工事についての検討を依頼された。

- 5) 大月浩子は、諸外国や国内の子どものミュージアムの紹介を行っている。国内では、子どもたちのためのワークショップや鑑賞教室に重点を置いている美術館、こどもの城（東京）・キッズプラザ大阪・ビッグバン（大阪）のような大規模な児童館的な施設、篠山チルドレンズミュージアム（兵庫）や霊山こどもの村（福島）のようにいわゆる田舎に創設された施設などがある。
- 6) 「岐阜県美術館」では、「こどもワークショップ」「こどものための鑑賞教室」「幼児と子供の造形教室」などの教育普及活動をしている。「みのかも文化の森」でも毎年度「活用の手引き・活用実践集」を編集し、小・中学生を対象とした体験学習プランを提示している。
- 7) 教室開放促進事業は、学校・家庭・地域の連携をもとに、学校施設を開放したり多様な学習の機会を提供するために実施された。要綱によると「地域住民の身近な教育施設である小学校・中学校の持つ教育施設・機能を地域に開放し、子供が仲間と楽しく学び合い活動できる場を提供するとともに、地域住民に多様な学習機会を提供する」という。
- 8) 平成14年度からの完全学校週5日制にむけて、地域や家庭での有意義な過ごし方について提案や実践を行う必要があった。岐阜県教育委員会では13年度から「生き活きウィークエンド地域ふれあい事業」を実施し、県内各地域での余暇利用の実践を支援した。筆者はその委員長を担当するとともに、13年12月の美濃市の「市民のつどい」において、コーディネーターとして「完全学校週5日制について」というテーマで小・中学生によるシンポジウムを行った。
- 9) 岐阜県教育委員会の「完全学校5日制がスタートーはつらつウィークいきいきウィークエンドー」と題するパンフレットを参照。
- 10) 紙を素材とした造形に取り組む国内外のアーティストを、毎年9～12月にかけて5人程度招聘している。当初の5年間は文化庁の補助事業として実施してきたが、国際交流やまちづくりの活動が広く評価され、その後も美濃市の事業として継続されている。アーティストが滞在するだけでなく、子どもたちや市民と積極的に交流したり、ボランティアの実務委員が事業を支えている点に特徴がある。平成15年度は、既に7年目にあたる。筆者は特に子どもたちを中心とした造形ワークショップや学校の図工等の授業における海外アーティストとの交流に取り組んでいる。造形活動を通した子どもたち・海外アーティスト・大学生・地域の人々とのコラボレーションや交流は、相互に意味のあることであると考えている。
- 11) 楽器をつくる題材は、従来の学校教材の中でも見受けられるが、それぞれの教科の性格によって扱い方が異なっていた。図工の場合には、材料を試行錯誤しながら組み合わせ、音を見つけだすことが行われる。発想を生かす場面は多いが、実際に楽器として使用するには幾分困難を伴う。音楽や技術の場合には、材料やつくる手順があらかじめ示されることが多い。演奏するにはよいが、材料やかたちを工夫する要素が少ない。数年前から、岐阜大学で美術教育を専門とする筆者と、音楽教育を専門とする松永洋介助教授とが協力して、合科・総合的な見地から楽器づくりの実践をしている。
- 12) 中央教育審議会 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」（平成8年7月）の「今後における教育の在り方の基本的な方向」
- 13) 前掲書、(2)
- 14) 目黒実は、2001年に廃校後の中学校を活用した「篠山チルドレンズ・ミュージアム」の開設に携わった。「篠山チルドレンズ・ミュージアム」の施設や実践内容については、目黒実『学校がチルドレンズ・ミュージアムに生まれ変わる』（ブロンズ新社 2002年）を参照。
- 15) 大月ヒロ子 『新・わくわくミュージアム』SSコミュニケーションズ 2003年 P.9
- 16) 平成15年6月20日に石川市長と面談した際に、ワークショップや社会教育での役割に加えて、美濃市の教育全体の指導助言者として位置づけるといふ、市長からの提案もいただいた。
- 17) 「美濃市子ども創造館」の開設に際して、教育活動のための荷物や学生スタッフの移動を考えてワンボックス

スの車を自費で購入した。大学と美濃市内との移動が多くなり、2往復する日もでてきた。大学と自宅との通勤だけの時期と比べると3倍程の走行距離になっているが、それだけの価値や魅力が美濃市の環境には存在している。

付 記

「美濃市子ども創造館」の設立に際して、石川道政市長、後藤正之教育長、川嶋智孝前教育長、川野純社会教育課長・村瀬伸文化会館館長・井上司課長補佐をはじめ社会教育課の職員、平田勝栄上牧小学校長、勝本幹男前片知小学校長・河合幸代前片知小学校教頭をはじめ旧片知小学校の教職員、武井牧男市議会議員・中島清和片知本郷自治会長・太田己代治下牧出張所長をはじめ地元の方々など、多くの美濃市の関係者に、ご理解とご協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。